

# 幼児における創造性の機能と育成



篠崎謙次

「幼児に創造性を育てる」「創造性を育てる美育」というようなことが好んでつかわれるようになった。しかしこの場合育てられるべき「幼児の創造性」とは一体どのようなものであり、どんな性質をもった能力なのであろうか。創造性ということばが現場でしごく安易に無雑作につかわれているが、創造性そのもの、もしくは幼児の創造性の特質については一向に問われていないように思う。創造性とさえいえばそれ自体自明であるかのごとく、あるいはまた言葉の甘美なひびきやムードにひたって、それで創造性が養われているような錯覚に陥っているのではなからうかとさえ思われる。したがってわれわれはまず第一に創造性そのものについて考察し、とくに幼児の創造性についてその特質を把握しておきたいとおもう。

## 一、創造性

創造・創作・自己創造・文化創造など、呼ばれる。これらはす

べて自分らしい考えをうみ出し、自分らしい何物かをつくり出す働きである。そのように働く精神の傾向・能力・性質を創造性と呼んでよいとおもう。われわれは何を考え、何をして、結局は自分らしい考え方や仕方しかできない。たとえば上手な人のまねをしてみたところで、やっぱりいつの間にか下手は下手なりの自分らしいまねになってしまい、おのずとそこに自己がさらけ出されてくるものである。

人間生まれてからこの方、このように、自己自身の特有な感じ方、考え方、行動の仕方を通して生きてきたのである。すなわち個性にもとづいて自己をつくり出し、自己を創造しながら生を展開してきたのである。このように考えると、創造性とは自己が自己の生命を展開する原理であり、生命の必然的な機能であるといえる。したがって創造性はすべての人間・乳幼児・青少年・成人を通じてすべてのものに与えられている精神の働きであり能力で

ある。すなわち生きることそのことがすでに創造的に生きることであり、人間が機械にならないかぎり創造性の働かない生き方というものはおよそ考えられないといえよう。

このように創造性はすべての人間に与えられ、すべての人間は創造的に生きているのであるが、その働き・その発現にはおのずから高低・深淺・強弱がある。非常に独創的な考え方をするものもあればひとのあとから追いつけ模倣に明けくれるものもある。そこに独自の生命を發展させるためには、より奥深い創造性を育てなければならぬ理由があるのである。しかも自己実現・自己創造ということが現代的な意味において生きることの意味であり目的であるとするならば、今日の教育において創造性を高めることこそ、本質的に重要なことであり、人生の生き方を追求する教育の根本問題であるといえよう。

ところで創造性が生命の機能であり働きであるといっても、それは何らかの内容と結びつき内容をもたなければ働くことはできない。精神活動としての創造性はいまだ未発の状態にひそんでいられる可能性でしかない。可能性であるからある条件・すなわち環境や生活経験という内容を得なければ現実化しないのである。記憶力・推理力・想像力といっても、何を記憶し何を推理するかの内容がなければ、現実の力となってあらわれて来ないと同様である。したがって創造性とそれが現実化するためには如何なる内容が与えられるか、何を基礎とし何を土台として創造性が働き出し

働くものであるか——その基底となる内容こそ重要なものであると考えられる。

## 二、創造性の基底

創造性を刺激し、これに火をともして現実の働きをおこさせるものは、何といってもまず現実組織であり経験であるといえる。現実を正しく認識し広い経験を素材として、そこにゆたかな創造性がわきおこるのである。小説家が山の遭難小説をかこうと思ふとき、山や山の遭難についてあらゆる資料をしらべ、それだけでなく自ら危険を冒して冬山を経験しようとする。また詩人が郷土のうたや校歌などの作詩を依頼されると、必ずその土地や学校をおとずれ、その目その耳で特徴をつかまえようとする。このように事実にくれ、直接に経験することによって、イメージがうかび、詩想がわくのである。また画家が千里を遠しとせず世界の風景にふれ、建築家が古今の代表的な建築様式をたずね歩くのも、みなこれ創作意欲をおこし、よりよき創造活動をなすための基礎づくりには他ならない、つぶさに事実を認識し豊かな経験をつむことなしには、創作の泉はすぐ枯れはててしまふ。したがってこのような事実認識やゆたかな経験こそ創造性の源泉であり基底である。

幼児はいまだ未知・未経験な世界にあって、一つ一つの事実を自らの感覚を通してとらえ、経験をひろげていく。このような事実や経験にうち当たること自体に新鮮な興味や感動をおぼえ、彼

らの精神は躍動するのである。すなわち心がはずんでおのずと想像性が刺激され、新しい感興がわきおこり、次々と新しい感じ方や表現などがあらわれてくる。このようにして幼児の創造性といえども無から有を生ずるわけにはいかない。必ずその基底に、現実認識・現実経験のひろがりが必要ならぬのである。この意味で幼児の創造性を活動させるためには、できるだけ事実によくふれさせていくこと、感覚的な経験をくり返し、つみ重ねひらげていくことが大切である。

### 三、幼児の創造性

「幼児に創造性を育てる」ということは、幼児に創造性のたねもしくは芽生えが存在することを前提としたことばである。創造性が生命の必然的な機能であるとする筆者の立場からすれば、この前提は無条件のみにとめられなければならないが、いうところの幼児の創造性とは、一体どのような意味で使われているのだろうか。それは一般におとなたちがいう文化創造というような意味での創造性と同じ性質のものであろうか。もしくはまた幼児特有の創造性というものがあって、おとなたちもっている創造性とは質的に異なったものと理解すべきであらうか。このような意味で幼児の創造性の機能・特質について考察してみよう。

一般に成人の創造性はつねに一定の目的をもち目的追求の上になつてはたらく性質をもっている。たとえば生活上のよい工夫を思いついたとか、部屋のかざりつけに新しいアイデアが生まれた

とか、主婦の発明工夫展などの創造的活動にしても、みな何かの不便を感じ、もつとよいやり方や便利なものはないかと考えて生まれたものである。単に思いつきのもの——あるいはそれを深めた程度のものであっても、それはみな目的に支配され、目的にそつて生まれたものである。

しかもこのような目的に支配されてあらわれる創造活動は、その目的追求がはげしく一途のものであればあるほど、精神の苦惱を経験する。学問や芸術上の創造、あるいは技術的創造（発明のごとき）など、おしなべて文化創造といわれるものは、単なる思いつきや表面的な工夫だけでは歯が立たない。もつと精神の深層にくだり込んで徹底した思考活動をくり返さなければ成就しないのである。今までになくて誰れも考え及ばなかったものを、何人もなし得なかつたものを考えようみ出そうとする意志と努力、このような精神に支えられて創造性はその力を極限まで發揮されるのである。そこで創造者は、たゆまぬ探求をかさねるが、失敗に失敗がつづき、内心の苦惱を感じるのが普通である。

生みのなやみといわれるように、われわれが自分らしい、自分になつとくのかい何物かをつくり出そうとするときには、必ず何らかの苦心・苦痛——さらに精神的な苦惱をすら体験するものである。いまわたしは「幼児の創造性」についての原稿を求められているが、ひき受けたもののはじめから筋書きがきまつているわけではない。そこでわたしは自分らしい考えをまどめしぼり出そ

うと苦悶する。それはわたしなりの一つの創造であるにちがいない。しかし書こうとする内容や表現が思いのままにすらすらと流れ出てきてくれない。書こうとする前に、ある期間何をどう書こうかと思ひ悩む。考えが固まらないのである。そこで自己自身の創造活動について過去の経験を思い浮かべたり、すぐれた創造者たちの創造活動についてしらべてみたり、創造性について述べられたいままでの論文を探し出して読んでみたりする。さらにまた幼児の精神の働き方についてその特質を明らかにしてみる。このようにして材料をあたためているうちに次第に考えがまとまり、固まってくるのである。そこでどのようにして道を立てて表現するか想をねって原稿紙に向かう。しかしいざ書こうとなると思うように表現できない。書いては消し消してはかく。原稿紙をむだにしながら創造活動は進められていくのである。そこではわたしのふだんの生活にみられないほどの精神の集中統一が要求されている。したがって原稿ができ上がるまではわたしにとって非常な苦しみである。このようにわれわれ凡人には、苦しみまでのきつい精神の集中統一がなければ、本当の創造はあらわれ出てこないし、創造性もフルに活動するわけにはいかないであろう。

ところがよく天才・名人・達人などと呼ばれる人が、神の啓示や靈感を得て一気にすばらしい芸術上の作品をうみ出し、学問上の新しい真理を発見し、あるいは人生の悟りをひらいたというようなことがいわれている。そしてそれは創造活動の極致であると

いってよいであろう。ここでは一見何の苦痛も努力もなしにすばらしい創造活動が行なわれたかにも見える。しかし、それは皮相な見方であって、無為にして神の啓示や靈感はあらわれるものでない。すなわち安逸をむさぼり、平凡な生活を送っているものにインスピレーションがあらわれることはないで、それは泥まみれの精神の苦悶の賜である。したがっていかなる天才・名人・達人たちも、自己の創造活動について、決して安易に易々として行なったものでないことを強調する。彼らは絶えざる日常の努力、苦しい修業や練習錬磨によって精神を統一し、凡人に及ばぬ境地に到達したものである。釈迦がある日ふと悟りをひらいたのも、衆生済度の長い精神の苦しみをのり超えた結果ではなからうか。したがって天啓・靈感・詩想などが湧きおこるためには、そこに至る過程に長い苦悶の歴史がひそんでいることを忘れてはならない。

しかし一般によいアイデアが生まれ、インスピレーションがあらわれるのは、必死に目的追求の努力をしているときよりも、むしろつかれはてて、一時精神集中の努力を休止し、目的から解放されて精神の緊張がほぐれたときにあらわれるものだといわれる。たしかにそれは目的から解放され精神の自由な状態においてある日突如としてあらわれる性格をもっている。けんめいに目的を追っているときは、精神の緊張が一つの方向にだけ向けられて、考え方の転換ができないために新しいアイデアが生まれないのである。ところがそのような一方的な緊張から心が解放されて

無心にもものを見、ものにふれたとき、はっと気がつく。それが偉大な創造につながるかどうかは、それ以前の努力や錬磨に関係していると思われる。目的を忘れ、目的から一応解放されたとき、無為・無意識・無目的に徹したときに自由な見方ができ、精神活動の質的な転換・飛躍があらわれるのである。

右のような創造性の極致は、その無目的、無意識・無心の状態において、幼児が無心に遊んでいるときの心の状態にはなほだよく似ている。雑念をはらい童心にかえったときに悟りがおとずれるといわれるのも、このことを示したものはなからうか。しかしいうところの童心とは、幼児がいまだ経験や目的意識の未分化な状態における童心とは、精神活動の質が異なっている。幼児にあっては精神の苦闘・苦惱・まよいを感じるということはない。単純で純真そのままの童心がそこにある。したがって幼児の精神がいかに創造的であるといっても、成人のそのように長い間目的追求のプロセスをたどって働きつづけるものではない。そのため心のくるしみを味わうことはないのである。むしろ興味を感じたものに無意識的に心がひきつけられて楽しいのである。それは成人のように意識して集中するのではなく、無意識・無目的に対象に心がすいつけられ、心がうばわれるのである。このような状態において身体をうごかしたり、物をつくり線を描き色をぬっているうちに、いままで経験したこと、知っていることなどが次々と精神活動の流れにうかびあがり、それが現在の行動と連想的に結

びついでいく。幼児はまだおとなの習慣だとか型だとかもしくは遊具の目的などにとらわれないから、とっぴょうしようもないことに思いつくのである。またアニメズム・相貌的知覚・共感覚などの特徴によって、成人にはおよびもつかない感じ方や考え方をする。

幼児の精神活動は流動的で一つのものの一つの考えに固執することがないから、思考は次々と回転していく。いわばひよひよいと思いつくままに表現するというのが幼児の心の働きであり、このような精神の働きが創造性と叫ばれる。いわばはじめから目的意識から解放された天衣無縫・まったく自由な遊びの精神から出発している創造性である。したがってそれは自由に自然にうかび上る想念であって、空想性や想像性を基底として働くのである。

右のような意味で幼児の創造性は、自由で楽しい雰囲気の中でなければ発揮できないものであるといつてよい。

#### 四、幼児の創造性と模倣

幼児は模倣の天才である。彼らの語ることは、うたう歌、描き出す絵、さては遊びなど生活のほとんどすべてが模倣から出発している。コマ・シャルソングなどはおとな顔負けで何でも知っているし、奇妙な動物をかくと思うとこれも怪獣映画の影響である。オリンピックがはじまればオリンピック遊び、パラリンピックのときには三輪車をうしろ向きに乗って両手で車輪をまわして競争するし、お祭りがくればオミコシゴッコ……見るものきくもの即座にまねてしまう。わたしの一家が田舎へ疎開したころには

よくやみ商人がめぐってきた。四歳になる男の子が大きな風呂敷にガラクタおもちゃを一ぱい包み、それを首に巻きつけてどこかへ行ってしまふ。どうしたのだろうと思っていると、しばらくして玄関の戸が開き、「コンニチワ……〇〇からヤミヤチャンです。……ヘッケンはイルマせんか……」また兄弟して大きなかごを伏せて中に入り、わどり、ごっこ、ひとりりが四つんばいになって口にひもをくわえ、ひとりりがそのひものしを引っぱって馬方ごっこ、さては棒を肩にかついでためか、つぎ遊びまで表現する（その動作が奇妙によく似ている）にいたっては模倣というよりも、それ自体創造的な活動であると感じたものである。

このように幼児は、おとなが思いもかけないことに思いつき、創造性をはたらかして遊ぶものであるが、しかしそれは大部分何かのまね、模倣であることが多い。しかし全く型どおりのまねではなく、そこに子どもらしいアイデアによる変形があるのである。わたしはしばらく前に、幼稚園で五、六人の男の子がテニスボールを用いて野球遊びをしているのを見たが、そこで使っているバットがなんと大きな木製のシャベル（砂場などを掘り返す）であるのにはおどろいた。これなら先が幅広であるからボールが当たり易い。またベースは一塁しかなく、しかも走者にボールを投げつけてもアウト。これは彼らにまだ十分な捕球能力がないところから自然に考え出されたものであろう。野球というむずかしい遊びをどうしたらうまく遊べるか、彼らは彼らなりに自分たちの

興味や能力に合ったやり方を工夫し規則を変え単純化して遊んでいる。そこにはまさに子どもらしい工夫と創造が働いているが、もとはといえば野球をみてる模倣である。幼児はこのように興味を感じたものを何でもとり入れ、模倣し、模倣しながら創造していく。むしろ模倣の中にこそ創造があるといつてよい。

このように考えると模倣と創造とは決して相互に矛盾し対立して働くものではない。創造性の価値を高く評価するあまり、模倣をもって価値なきもの、創造性に反するものとして排除することはあやまりである。（もちろんここでの模倣は単なる機械的なまねのことをいっているのではない）無から有は生じないように、幼児の創造活動ももとはといえば見たこと、聞いたことのまねであり模倣である。模倣しているうちに、幼児精神活動の特質にしたがって（想像性・空想性・共感覚など）いろいろな形・色・音などが表象となつてうかがひ上がってくる。幼児の創造性とは、実はこのように心の中にかび上がった表象をつぎつぎと子どもらしく表現する——このような心の働きの中にあらわれてくるプロセスと考えることができる。子どもとおとなでは精神の働き方が質的に異なるものであるから、おとなは子どもの奇抜な着想におどろくのである。しかしそれが直ちに高い文化の創造性につながると考えるのは妥当でない。（幼児期にすばらしい造形のアイデアを示した子が大きくなるにしたがってつまらない表現しかできなくなるといふような例が少なくない）なぜなら幼児の創造性

は、ある場合は根拠のない空想に根ざすものであり、またある場合未分化な共感覚のもたらすものであって、現実から多くの距離をへだつものであるからである。そしてこの現実と幼児の創造活動との距離をちぢめるものは、事実にもつて経験をゆたかにし、現実を卒直に認識するようになれば、それにもつて創造活動も質的に高まり文化創造への方向へ伸びていくのである。

### 五、幼児の創造性を育てるために

それでは右のような考察にもつて、幼児の創造性を育てるにはどのような配慮が必要となるであろうか。

#### 1 絶えず現実認識に帰る

自由に創造活動を行なうことが根本であるが、ゴジラもラドンも鉄人や黄金バットも現実には存在するものでないことを知り、現実と空想との区別をつけること空想的なものから実存のものへと目をむけていくこと。実際に存在するものには多種多様な存在の仕方があることに気づかせることである。そこから多様な思考活動が生まれ発芽してくる。

#### 2 経験をゆたかにする

感覚を通して身体でぶつかっていくような経験を豊かにしていくこと。経験は創造性を活躍させる場所であるとともに絶好のチャンスを与える。貧弱でせまい経験から豊かな創造性は育たない。

#### 3 自由に子どもらしい表現をする

自由な雰囲気の中で、子どもらしく表現することである。形や線・音程やリズムあるいは動作の正確さを要求して、外から圧力をかけたり型にはめすぎると、精神の働きが一方に硬直して、自由な感受性、のびのびした活動がはばまれ、創造性は枯渇する。この意味でしつめい型にはめきびしすぎると創造性を疎外する。とくに幼児期では身体的にも精神的にも、ものごとを正確にみたり行動したりする能力は未熟である。したがっておとながみて整った形や正確な動作を期待することは良策でない。

子どもは子どもらしい表現法をもっている。たとえおとながみておかしくとも、いまは子どもの表現法をみとめはげまし伸ばしていくことが次の時期への発展に役立つものである。早く幼児時代から音楽やバレエ美術遊芸ことなどの基礎訓練・基本となる型を仕込むことは、将来の専門家を目指す以外適当でない。それは幼い魂を圧迫し興味を失わせるおそれがあるからである。

#### 4 表現をくり返す

表現をくり返し、数をかけることが必要である。造ってはこわし、こわしてはまた造る。そのような活動自体があそびであり、そこに興味を感じるのである。したがってたとえでき上がったものがどのように貧弱で、まずいものであっても、「できた、できた」とよろこんでいるのが幼児のいつわらない姿である。幼児の活動はでき上がったすばらしい作品がめあてでなくて、作る働きそれ自体が目的である。そこでは完成のよろこびと同時に活動の

よろこびが大きく作用している。幼児がせっかくなりに作上げた作品を無難作にこわして何べんも作りかえるのは単に破壊本能から来るのではなくて、このような活動↓完成のよろこびをくり返し味わっているのである。

また人は機械ではないから同じことを何回くり返しても全く同じ表現、同じ結果は得られない。そこにいままでとちがった形色・線・動作などがあらわれていることに気がつく。それがまた創造性を刺激するのである。そして新しい変化がおこる。幼児はよく毎日毎日同じことをして遊んでいてあきないものだと思うが、くり返している間に身心の機能が練習され、いろいろな遊び方に気づき、遊びが次々と変化し発展しているのである。つまり幼児は日々に新しい経験をしているのである。一本の線をかいているうちに、まるになり四角になり、それが人の顔にみえたり自動車のようなかっこうであることに気づく。この気づきが次の創造活動を刺激して生み出していくのである。

このように表現をくり返すことによって創造性は触発され高められるもので、できるだけくり返しの機会をつくり、くり返しのきく材料を与えることがのぞましい。たとえば遊びは子どもの生活から生まれたごっこ遊びのように役割を交替し、道具などをつくり取り替えたりして遊べるもの、造形では砂場や粘土のように作ったりこわしたり自由にできる活動こそ創造性を盛んにする最もよい教材であるといえる。

## 5 ひとのやり方を模倣する

すでにわたしは模倣の中に創造性がはたらいっていることを述べた。この意味でまったく模倣のできない子どもは創造性も働かない、いろいろなやり方や考え方をまずまねてやってみる。そこから自分のやり方や考え方のヒントが得られる。未経験な自分だけのせま苦しきにとじこもらないで、心のまどをひろげ、できるだけ多くのことをまねてみる必要がある、ここでいう模倣は機械のように一つおぼえのまねをすることではないこともちろんである。

### むすび

「幼児に創造性を育てる」というと一般に絵画製作や音楽リズムの指導の問題と思われ易い。しかしそれは幼児の生活全体の中に展開される必然的な働きである。幼児の生活は大部分が遊びであるから、遊びの中でこそ幼児の創造性は全的に発揮されるようになってよい。もちろん造形活動や音楽リズムにおいて創造性を育てることは重要なことにちがいないが、もつと遊びの中でどのように創造活動がはたらくか、創造性がのぼされるかを問題にしなればならないとおもう。いうところの絵画製作や音楽リズムにおいては、でき上がった作品や表現の技術にとられることなく、製作活動・表現活動そのものを重んじ、自由に創造性をはたらせる場所と機会を準備して、つくるよろこび、表現する楽しさを味わわせる。かくて身心の機能を練習し精神の解放と安定に導くよう指導したいものである。

(宇都宮大学)